

増上寺所蔵の三大蔵について

20211129 於増上寺

下田桃子（成蹊高等学校教諭）

1. 増上寺所蔵三大蔵（宋・元・高麗版）とその由来¹

①宋版（思溪版）

→ 慶長 18（1613）年に近江国伊香保郡真言宗の菅山寺^{かんざんじ}から徳川家康が召上、増上寺に寄付

②元版（普寧寺版）

→「縁山三大蔵経縁起」²によれば由来不明ながら、一説に伊豆修禅寺から家康が召上、慶長 15（1610）年に寄附したとされる

⇔ 伊豆修禅寺に元版が所蔵されていた記録なし／増上寺蔵の元版の墨書から、一部は周防の香積禅寺（もと大内義弘の菩提寺）や氷上寺（大内氏氏寺）に所蔵されていたことがうかがえる／周防の大内家が明あるいは朝鮮から輸入したものか

③高麗版（再彫版）

→ 慶長 14（1609）年に大和国添上郡真言宗円成寺から家康が召上、増上寺に寄付／もと文明 14（1482）年、大和国円成寺栄弘が足利義政の国使として朝鮮に渡った際に将来し円成寺に納めたもの

2. 江戸時代の増上寺と三大蔵

（1）檀林寺院としての増上寺³

- ・徳川家康による学問重視政策＝関東檀林寺院の重視
- 増上寺を含む関東十八檀林で修学をして初めて浄土宗僧侶としての資格が得られる仕組み
- 檀林筆頭の増上寺には江戸時代を通じ、全国（東北から九州まで）から入寺者が集まる
- 時期によって異なるが一年に 100 人前後の新規入寺者、1500～2500 人前後の修学僧（所化僧）が所属
- ・修学課程は九つの部⁴に分かれ、修行年数に応じていずれかの部に所属、定められた学問・修行を行う
- ・山内では学寮に所属、各部を部転（各部 3 年）しながら修学を積む
- ・上座三席（修学年数が長く学席が上位の所化 150 名）には法問や講釈が義務付けられている
- 法問：ある問に対して経論を引きながら比喻をあげて解釈を試みる、問答形式の学習
- 講釈：講義形式のもの、講書を事前に選び十分研究して開講、進級試験も兼ねる

¹ 堀池春峰「中世・日鮮交渉と高麗版蔵経」（『史林』、43(6)、1960）、『増上寺三大蔵経目録解説』「第 1 編 三大蔵経の沿革」（増上寺、1982）、金山正好「〈講演〉増上寺の三大蔵経について」（『武蔵野』303、1983）。

² 延享 5 年（1748）、増上寺僧知蔵随天が編纂した三大蔵経の縁起。

³ 撰門『三縁山志』（『浄土宗全書』第 19 巻、1975）、梶井一暁「浄土宗関東檀林における修学僧の入寺・修学動向」（『広島大学教育学部紀要』第一部（教育学）第 47 号、1998 年）同「浄土宗関東檀林の修学僧に関する考察」（『日本の教育史学』第 42 集、1999）、宇高良哲『近世浄土宗史の研究』（青史出版、2015）、同『近世浄土宗教団の足跡』（浄土宗、2015）、下田桃子「浄土宗檀林寺院の僧侶集団と寺院運営」（『論集きんせい』37、2015）、長谷川匡俊「檀林教育における法問と講釈」（同『近世浄土宗・時宗檀林史の研究』法蔵館、2020）。

⁴ 名目部・頌義部・撰撰部・小玄義部・大玄義部・文句部・礼讃部・論部・無部の九つ。

→修学を積みながら、途中で全国の寺院住持職を得る／檀林寺院の貫主になる場合も

(2) 増上寺所蔵「蔵経之式条」からみる三大蔵の利用⁵

- ・経蔵で經典の出納・管理を担当する蔵司職の僧侶がいる
- ・開蔵日は毎月2・12・22日に限定、貸出は10日前後に限られる
- ・貸出は基本的に上座の所化僧に限定、あるいは講釈に必要な場合には上座の僧の印が必要
- ・山外への貸し出しは基本的に不可

→厳重な管理体制

増上寺に所属し、法問や講釈の際に三大蔵の閲覧ができることはかなりのメリットだったはず

3. 増上寺三大蔵と浄土宗の出版事業⁶

(1) 江戸時代における高麗蔵の再評価

- ・京都鹿ヶ谷法然院の忍激により鉄眼の黄檗版（木版印刷）と建仁寺高麗版の対校作業により、高麗版が良本であることが知られる（宝永3（1706）年～）
→増上寺と法然寺でそれぞれの高麗蔵の補写作業（延享3（1746）年～）
欠本が相互補完され、より充実した高麗蔵が両寺院に備わる

(2) 増上寺三大蔵を利用した出版物

- * 『無量寿経鈔会本』^{むりょうじゆきょうしやうえほん}七巻の出版：延享五年（1748）、貞鏡・智英による／了慧（道光）述の『無量寿経鈔』を出版／増上寺の三大蔵で対校
- * 『観仏三昧海経』^{かんぶつざんまいかいきやう}の出版：寛政六年（1794）、典寿による／黄檗版を底本とし、高麗蔵で対校／増上寺の高麗蔵を見ていた可能性が高いとされる
- * 『観経疏伝通記』^{かんきやうしゆでんづき}十五巻：文政元年（1818）、音激による／良忠述『観経疏伝通記』中に引用されている經典の解説に際し増上寺の三大蔵で対校

4. 結び

- ・全国から入寺した所化僧が三大蔵を利用した修学の機会を得て、彼らがまた全国の寺院住職になっていく仕組み／増上寺に三大蔵が揃っていたことで、増上寺での修学環境は恵まれたものとなっていたと考えられる／浄土宗典籍の出版事業においても大きな役割を果たす
⇒浄土宗の教学振興を支える一方、閲覧できる立場はきわめて限定的（増上寺所属でなければ基本不可）
- ・徳川家康は大蔵経刊行を目指していたとされるが、江戸時代に増上寺の三大蔵を底本とした大蔵経刊行はかなわず
⇒増上寺高麗蔵を底本とした縮刷大蔵経（明治期）や大正新脩大蔵経（大正～昭和期）刊行として実現

⁵ 享保20（1735）年作成、前掲『増上寺三大蔵経目録解説』「第1編 三大蔵経の沿革」所収の翻刻を参照。

⁶ 馬場久幸『日韓交流と高麗版大蔵経』（法蔵館、2016）。